

水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>

臨 時 報
千葉県農林水産部
平成28年11月8日

良食味米生産に向け、稲刈り後の耕うんを行い 難防除雑草・病虫害防除対策を実施！

[これからの管理のポイント]

■おいしいお米づくりに向けた耕うん、土づくりの実施

気象変動に対応したおいしいお米づくりには、土づくりが基本となります。次作に向け、今から土づくりや耕うんを実施しましょう。

○稲刈り後の耕うんの実施

稲刈り後の耕うんは、土づくりの効果が期待できますので、速やかに耕うんを行いましょ。なお、再生株が大きい場合や収穫を断念したほ場では、ロータリーに稲わらが絡み付かないよう、事前に草刈り機等で刈っておきましょう。

すき込み時期が遅くなると、稲わらの分解が進まず、翌年の水稻生育期に分解し、メタンガスや硫化水素が発生し、ガス害や酸欠による初期生育の遅れ等が発生するおそれがありますので、早期に耕うんしましょう。



足を踏み入れるとガスが発生

○土づくり

稲わらのすき込み等の土づくりは、地力を高め、収量の安定化や天候不良での収量減少を抑えます。

また、けい酸資材を100~200kg/10a程度施用すると、根の酸化力が増進され、病虫害や土壌還元に伴う各種阻害物質に対して抵抗性を高められます。特に、老朽化水田や砂質土水田ではその施用効果が高くなります。

けい酸はかんがい水や稲わらからも供給されますが、水稻は1作で約100kg/10aのけい酸を吸収しますので、適切に施用しましょう。

■難防除雑草の防除

オモダカ、クログワイ、コウキヤガラ等の主に塊茎から発生する難防除雑草は、発生が長期間にわたるため、移植後の除草剤だけでは防除しきれません。秋冬期の耕うん等の耕種防除と薬剤防除を数年継続し、徐々に確実に塊茎を減らしていきましょう。

土壌が乾燥するほ場では秋冬期に数回耕うんすることで、塊茎を損傷や寒さで枯らすことも可能ですので、水稻を刈り取ったままにせず、耕深15cm程度を目標に必ず耕うんしましょう。

なお、詳細については県のホームページ平成27年9月のフィールドノートを参照してください。<https://www.pref.chiba.lg.jp/ninaite/network/field-h27/sui-2015-09.html>

■病害虫防除

○ばか苗病

ばか苗病は種子伝染しますので、種子更新を必ず実施し、適切に種子消毒しましょう。

周辺に、水稻種子生産ほ場がある生産者の皆さんへ

ばか苗病菌の胞子は少なくとも200m程度飛散し、翌年の種子となる開花期の籾に感染してしまうため、ばか苗病の発生は、水稻種子生産に影響を与えます。

優良種子の生産のため、ばか苗病対策に御協力をお願いします。

- (1) ばか苗病発生ほ場は秋耕し、稲株を土中に埋没して、菌密度を下げましょう。
- (2) ばか苗病の発生ほ場から収穫した籾や稲わら、その粉塵にはばか苗病菌が存在している可能性が高いため、浸種や催芽、は種をする作業場や機具機材を良く清掃し、ばか苗病菌の密度を下げ、感染リスクを下げましょう。
- (3) ばか苗病が発生してしまった苗を本田に移植するのは止めましょう。

○スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

本年は、海匝地域・山武地域・長生地域など九十九里沿岸の地域を中心にスクミリンゴガイの被害が多発しました。暖冬で越冬した貝が多かったことが原因と考えられます。

スクミリンゴガイは、越冬場所である用排水路からほ場に侵入してくることから、用排水路清掃等、地区全体で防除を実施すると防除効果が高まります。

収穫直後など土が硬い時にロータリーで耕うんを行うと貝の破碎効果が高まります。また、厳寒期は、田を乾かしロータリーで耕うんすることで、越冬中の貝を破壊すると同時に、寒気にさらし駆除しましょう。耕うんは走行速度を遅くし、回転数を早くします。スクミリンゴガイは土中の浅いところに生息しているため、浅く細かく数回耕すと、貝の破碎効果が高まります。

詳しくは、平成28年10月13日発行の病害虫発生予報第7号

(<http://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/documents/20161013hasseyohou07.pdf>)

及び、スクミリンゴガイ被害防止対策（安全農業推進課）を御覧ください。

(<https://www.pref.chiba.lg.jp/annou/nouyaku/applesnail.html>)

○イネ縞葉枯病（ヒメトビウンカの対策）

近年、ヒメトビウンカが媒介するイネ縞葉枯病の発生が増加傾向にあります。イネ縞葉枯病が発病すると、生育不良や出すくみ症状、奇形穂など出穂異常となり、減収します。



再生株の病徴

本病に感染した収穫後の再生株は、葉に葉脈に沿った不明瞭な黄色い縞状の病斑や奇形穂などの病徴が現れ、ヒメトビウンカが発病株を吸汁すると、ウィルスを保毒しますので、水稻収穫後は早目に水田を耕うんし、稲株を土中に埋没します。また、ヒメトビウンカの越冬場所を減らすため、ほ場周辺の雑草（特にイネ科雑草）も除去しましょう。

詳しくは、平成28年6月9日発行の病害虫発生情報第1号を参照してください。

(<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/documents/20150609hasseijouhou01.pdf>)

■ 飼料用米の取組

食生活の変化や高齢化等により、米の需要量は全国で毎年約8万トンも減少しています。（8万トンは千葉県のみ生産量の約3割に相当）

生産量が需要量を上回り在庫量が増えると、米価の下落を招きます。

米価安定のためには、これまで飼料用米に取り組んでいなかった方の協力が欠かせません。29年産での飼料用米の取組をお願いします。

過去に掲載した内容、水稻栽培の基本情報、病害虫の発生予察情報等については、千葉県ホームページ「生育情報」を御覧ください。(<https://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/>)